

令和4年度 第3回 東小学校運営協議会 会議録（要点記録）

- 1 開催日時 令和4年10月20日（木） 午前9時から午後10時50分まで
- 2 開催場所 東小学校 1階 会議室
- 3 出席委員 高木 邦子、小名木 秀雄、松下 克幸、今中 秀裕、中川 清子、
中村 将義、大脇 加名、竹山 有希
- 4 欠席委員 杉山 晴康、古橋 陽介
- 5 学 校 大石 泰三（校長）、杉山 章子（教頭）、
船越 裕康（CS担当教職員）、伊藤 リカ（CSディレクター）
- 6 教育委員会 鈴木 陽子（教育総務課）
- 7 傍聴者 なし
- 8 協議事項

（1）学校評価と課題の改善策について

（2）支援活動の具体化について

■花壇の水やり

■あいさつ運動

（3）その他

- 9 会議録作成者 CSディレクター 伊藤 リカ

10 会議記録

司会のCS担当職員から、委員総数10人のうち8人の出席があり、過半数に達しているため、会議が成立している旨の報告があった。

（1）学校評価と課題の改善策について

議長から、委員に意見を求めたところ、以下の発言があった。

■「心のこもったあいさつ」に対する具体的な手立て

- ・ 「心のこもったあいさつ」とあるが、1年生2年生においては、大きな声で元気にあいさつをすることが大切なのではないか。「心のこもった」とは何なのかがわからない。（高木）
→相手の目を見たり、名前を呼んだりということが伝わるあいさつと考える。学校内ではできていても、外ではわからない。また、休み明けのあいさつは特に良くない。（校長）
→家庭との連携があいさつの習慣につながるかと思う（高木）
- ・ 1・2年生に対して教師が立ち止まって丁寧なあいさつをするのは疑問。目上の人や年長者に対して丁寧なあいさつをすることが大切であるため、教師はもっと気軽な声掛けや返し方でよいのではないかと。（今中）
→日常生活においては自然に挨拶が出るようにするべきだと思う。（高木）
→先生は先生らしく、教師（大人）と生徒の関係性の見直しが必要なのではないか。友達のような関係でいることが、子供たちの言葉遣いの悪さにつながるのではないかと考える。（小名木）
→低学年に対する教師のあいさつについてはソーシャルスキルトレーニングとして行っ

ている。(教頭)

- ・ 放課後の言葉遣い(乱暴・あいさつがない)は本当に悪いため、具体的な教育が必要なのではないかと。テレビやゲームや年上の影響が強いため、言葉やあいさつで相手がどんな気持ちになるかを伝えて気が付かせたい。一方、あいさつが恥ずかしい子もいるため、子供たちの心を気遣うことも大切である。また、家庭と学校の連携が大切。家庭で教育しなければあいさつは浸透していかない。(中川)
- ・ コミュニケーションができている状態とは、自分のことと相手のことを理解している状態だと思うため、教師が手本になるというより、あいさつリーダーなど身近なモデルを手本としたほうが身につくのではないかと。(中村)
- ・ あいさつは習慣化されればとても簡単なことであるため、その機会を作ればよいと思う。(竹山)
- ・ 大人でも知らない人にあいさつはできない。しかし、そうなりたいとは思ってはいるので、その気持ちは子供たちも同じなのではないか。気持ちを実行に移せるためには、しつこく家庭で教育することが大切だと思う。(大脇)
- ・ 近所の方たちにも周知してもらうのが良いのではないかと。(高木)
- ・ 勉強としつけは家庭であるため、あいさつの原点も家庭であると考え。教師は無理にさせるのではなく、あいさつをしているだけで良いのではないかと。学校の忘れ物についても家庭内のコミュニケーション不足が背景にあると考え。(小名木)
→昔は兄弟が多く、家庭内でも上下関係がきちんとあったが、現代の家庭では母親しか身近な人がいないため、家庭内のみの教育では難しいのではないかと。(中村)
→核家族化が進んでいるため、上下関係を学べる先輩がいる場合は、学校やスポーツ少年団であると考え(高木)
- ・ 子供が係わる環境全体の中で自然とあいさつが出るのが大切である一方、なぜ、あいさつをするのかという理解が実行につながるのではないかと。高学年になれば理解ができているので、あいさつをする具体的な理由を教えるのが良いのではないかと。(松下)
→低学年においては、ソーシャルスキルトレーニングを通すことが良いと思う(高木)
→あいさつの価値とは具体的に何であるかを伝えるのが良いのではないかと。(中村)
→「できない」をそのままにせず、できるまで指導をすることが大切。その方法を考えることが大人の役割であると考え。(松下)

■「落ち着きがない」に対する具体的な手立て

- ・ 1・2年生のうちは落ち着きがなくても、成長とともに落ち着くことが多い。辛抱強く見守るのが大切。自然に少しずつ指導するのがよいのではないかと。(松下)
→個別による特性という側面ではなく、大きな観点での「落ち着きがない」が課題。廊下でのケガを減らしたい。(船越)
→時間の問題や、子供の性質、学校の空間等いろいろな環境が問題。(校長)
→学校の空間においては、走れない仕掛けを作れたら良いと思う。世界に目を向けている色々なアイデアを取り入れることは可能である。(中村)
→時間に余裕をもって行動できる環境づくりのため、2学期以降に時計を増やした。日常のケガを減らすことにつなげたいと考える。(船越)

- ・ 子供達にとって、『落ち着いた生活』は難しいため、『ケガ防止』を目標にしたらどうか。
(松下)
 - 道路交通法的なアプローチもある。(高木)
 - 廊下にコーンを設置したが、子供達は飛び越えてしまった。このため、結局言葉で厳しく言うてしまう。子供達はエネルギーが余っているから外で遊ばせたいが、声を掛けても外で遊ばない子が多い。(中川)
 - 服が汚れることを嫌がり、外で遊ばないケースも考えられる。人工芝など検討するのはどうだろうか。(中村)
 - ケガは良くないため、廊下で走ることについては、ペナルティを与えるのが良いのでは。
(松下)
- ・『落ち着いた生活』のとらえ方から考える必要がある。(教頭)

協議の結果、全員異議なくこれを承認した。

(2) 支援活動の具体化について

■花壇の水やり

- ・ 引き続き少年団で行うことになった。(大脇)

■あいさつ運動

- ・ 地域の方とどのような取り組みをするかを考えた。11月11日は浜松のあいさつ運動であり、地域であいさつの声掛けを行っている。このため、東小ではR5.1より毎月11日の平日を『あいさつの日』としたい。具体的な取り組みは下記の通りである。
(大脇)
 - 地域の方に昇降口や通学路で自発的に行ってもらう予定。
 - 横断幕を作り、回覧物や口コミで周知を図る。
 - 民生委員に知らせる。
 - ネームホルダーにあいさつ運動実施中と明記したものを用意し、それをつけて参加する方法も検討する。
 - ルールや義務化ではなく、時間や場所についても各自に任せ、あくまでも自発的に行ってもらう。
 - さくらメールで情報を発信する。

→地域の回覧物は中身まで見る人は少ない。このため、学校のものを利用して知らせる必要がある。あまり範囲を広げずに、学校周辺から始めるのが負担なく始められるのではないかと。各町によって取り組みが違うため、自治会全体での実現は難しい。(小名木)

→情報をどこまで広げるか、ということは、可能なツールをつかって広めるのが良いのでは。(高木)

→実行するには各所の調整が必要であるが、各自治会同士が希薄であるため、形づくりをしたほうが取り組みやすい。学校から自治会連合会に提案するのが良いのではないかと。『あいさつ運動』に特化すると自治会としては実行しにくいいため、『明るい街づくり』の一つとして「あいさつ運動」を取り入れる事を望む。この件については、

定例会で報告し、自治会に意向を聞いてから決めたい。(小名木)
協議の結果、全員異議なくこれを承認した。

(3) その他

- ・ 東小のグラウンドの芝生化の話は10年前から出ているが、管理が大変であるため、実現に至らない。また、人工芝は子供の足に負担が大きい。(小名木)
- ・ 10年前は浜松市から芝生化の承認を得ることができなかった。一方、佐藤では天然芝を利用しているが、やはり管理が大変であるため、東小の芝生化は進めない方がよい。(松下)

次回議長については、小名木会長から中村委員を推挙する旨の発言があり、協議の結果、全員異議なくこれを承認した。また、小名木会長より、次回以降の議長については、全委員で持ち回りをするのではなく、今年度議長経験者で行ったらどうかとの発言があり、協議の結果、全員異議なくこれを承認した。

○ その他報告事項等

司会から、次回会議は、令和5年2月13日(月)午後9時00分から東小学校会議室で開催する旨の報告があった。